花橘

発行日
令和７年１月23日
第 11 号
発行・編集
三崎高校総務課

ある日の出来事

事務長　西村　浩則

昨年十二月のある会において、私は受付業務をしていた。その受付の際に三十数年ぶりに同級生と再会した。彼に書類を渡しながら話しかけた。「久しぶり、〇〇くん。覚えてる？」相手の表情にとまどいが見られたので、「三崎高校で同じクラスやった、西村です。」とマスクをはずして自分の顔を見せる。「あ～西村くんか、久しいな。」といった反応を期待していたが、彼は一言、「ごめん、知らん。」と・・・三十数年ぶりでお互い姿・形は若干変わってはいるだろうが、知らんはないやろと思うと同時に、気軽に声をかけて昔話に花が咲くことを多少なりとも期待していた私は、非常に恥ずかしい気持ちと、声をかけなければよかったという後悔の念が押し寄せてきた。もはや再度、彼に話しかける勇気はなく、粛々と受付業務を終了した。改めて彼のことを思い出してみると、確かに在学中、特別仲がよかったわけでもないが、私は当時のクラスの仲間の顔と名前は多分、全員覚えている。帰校後も私はずっともやもやした気持ちでいた。

同日の夕方、私は事務室を出てテニスコートに目をやると、一人黙々とサーブ練習に励む男子生徒がいた。普段の私であればなにも感じることなく通り過ぎるところだが、なぜか今日はこの生徒と話したい気持ちになった。ふらっとコートに入り、「えっ」と驚いた感じの生徒へ声をかける。「一人で練習しているの？」、生徒は「顧問の先生から練習の許可はとっています。」と、私は、「三崎高校は私の母校でな、自分もソフトテニス部で、このコートで練習しよったんよ。」生徒は「ああ、そうなんですか。」さらにこの生徒の情報を集めるべく私は尋ねてみる。「君は何年生？テニス歴は長いの？」生徒は「一年生です。入部してまだ二週間です。」、ああ、だから居残り練習しているんだと思い、「一緒にラリーしてみる？」と誘うと、生徒は「お願いします。」さっそくラケットを借りてラリーをする。私は硬式テニスは初めての体験である。ラケットにボールが当たるものの、思った方向に飛ばない。その生徒は私のいる方向へきっちりボールを返してくる。まだ、テニスを初めて二週間なのに大したものだと思いつつ、なんとか彼の方向へボールを返していく。五分程度ラリーすると足が急に重くなり、息も上がってきた。体力の限界を感じてやめさせてもらった。「練習を続けていたらうまくなるんで、頑張って。」と彼に声をかけ、ふらふらと事務室へ戻る。短時間であったが汗をかいたおかげで、午前中のもやもやした感情はなくなった。練習中、突然声をかけたにも関わらず、親切丁寧に対応してくれた伸びしろしかない彼の活躍を願っている。

開校記念行事

１月 16 日（木）は開校記念日でした。そして、１月 24 日（金）に開校記念行事が行われました。伊方町教育長の中井雄治様をはじめ、多くの来賓の方々に御来場いただきました。スピーチコンテストでは、各クラス１名の代表者が「三崎高校と私」をテーマに自分の思いを熱心に伝えました。スピーチコンテストで最優秀賞を獲得した３年２組の鈴木悠乃さんは「自分の好きなものに関するスピーチで最優秀賞を頂けて嬉しいです。これからの三崎高校生の皆さんにもそれぞれの物語を紡いでいってほしいです」と伝えていました。また、優秀賞を獲得した２年２組の寺川佳花さんは「自分の考えや思いを発表するという滅多にない大切な機会、経験を頂けたことに感謝しています。この作文を書くうえで、改めて気づいたこと、４名の代表者のスピーチから学んだことを、これからの実生活にも生かし、より良いものにしていきたいです」と振り返っていました。４月から３年生は新生活、１・２年生は一つ学年が上がります。この機会にこれまでの学校生活を振り返ってみてください。自己の成長や学びを改めて自覚することで、来年度の目標が明確になり、きっと有意義な生活を送ることができるでしょう。

スピーチコンテストの結果	
最優秀賞	３年２組　鈴木 悠乃
優秀賞	２年２組　寺川 佳花
	１年１組　岩部 怜王
	１年２組　竹本 龍一郎
	３年１組　岩城 百々香